

地球一周の船旅 2016 ③

【南ヨーロッパ編】



2017年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

地球一周の船旅を2016年4月12日～7月26日の106日間で行ってきた。その旅行記は既に出航準備編、アジア編を発表してきたが、今回は南ヨーロッパ編としてエーゲ海、地中海、大西洋までをまとめた。どこまでを南ヨーロッパにするかは意見が分かれるところであるが、ローマ帝国の言葉であるラテン語を話す地域とした。

第一章 エーゲ海へ

■分断国家キプロス

ヨーロッパに入り最初の寄港地キプロスは私にとっては初入院である。

そして初めてオブショナルツアーに乗る。日帰り昼食付きバスツアーで12000円はやや高い気もするが、今回はどうしても北キプロス・トルコ共和国に行きたくこのツアーの乗ることにした。ツアー以外では北キプロスに行かないように船から強く言われている。

キプロスは1974年のキプロス紛争によって、ギリシャ系住民の南キプロスとトルコ系住民の北キプロスに分断された国家である。一般にキプロスというと南キプロスを指すのは国連加盟や多くの国に承認されているのが南であり、北はトルコが承認しているに過ぎない。したがって我々の船も南キプロスの港町リマソールに着く。

南キプロスも北キプロスとともに首都はニコシアという島の中央部の都市で、この都市も南北で分断されている。ちょうどベルリンが東西に分断されていたのと似ているが、ベルリンは東ドイツ領内にあったので西ベルリンに行くには飛行機のみであったが、ここニコシアはキプロス島の中央部にあり南北のキプロスはニコシアを分断する形で境界線が引かれている。この境界線をグリーンラインと呼んでおり、このオブショナルツアーはそのグリーンラインを徒歩で通過して

南キプロスから北キプロスに行く。

南キプロスは EU にも加盟しており通貨もユーロで便利である。3 か月前に行ったイタリア旅行の残金と今回追加してユーロの所持金は 833 ユーロ、日本円で 10 万円くらいある。これから行くヨーロッパ各国はユーロが使えるので楽である。

キプロスはアジアの喧噪に比べると綺麗で落ち着きがある。地中海性気候は温暖で雨が少ないので乾いている。日陰は涼しいし気持ち良い、日向は暑いカラッとしていてじめじめしていない。

ビザンチウム博物館に行く、キプロス各地の教会のイコンと呼ばれる壁画を集めて展示している博物館で年代的には 11 世紀～15 世紀くらいの古いものである。聖母マリアやキリスト、あるいは聖母マリアの母親などの絵とかレリーフのようなものであるが、キリスト教の文化を肌で感じる。双子の赤ちゃんが抱かれている絵があり、娘夫婦のために購入する。

南キプロスはギリシャ正教である。ガイドの説明によるとギリシャ正教は十字を切る時には右から左に切るそうで、カトリックは左から右に切るとのことで、そんなこともちがうのかと少し感心する。

昼食は、といっても 2 時にもなるが肉料理を中心に 14 種類の料理が出てくる。サラダが最初に出てきてあとはケバブ、ハンバーグ、ステーキなどほとんどが肉料理である。味は濃い美味しい。

ビールやワインが一人 1 本サービスということで、ワインは銅製のピッチャーのようなもので飲みきれないほど出てきて、事実上飲み放題である。

これでもかと次々にたくさんのご馳走が出てくる。多くの日本人観光客は半分くらいしか食べられない。ガイドの説明によると、これがこの国のもてなし文化という。「もったいない」が日本の文化だが、残させることがこの国の文化なのかもしれない。

レストランを出ると、すぐ近くに国境のグリーンラインがある。グリーンラインといっても緑の線ではなく、単なる国境で出国審査と入国審査がそれぞれある。パスポートを見せておしまい、スタンプは押してくれない。

もちろん歩いて国境通過である。今までの私の旅行経験で歩いて国境越えはナイアガラの滝でアメリカからカナダに入った時と、パチカン市国への入国くらいである。

北キプロスといってもあまり南と変わらない。国旗がトルコ国旗の色を赤から白に逆転したようなものなのでトルコ色が極めて強い。したがってイスラム教のモスクがある。キリスト教の教会をモスクにリホームしたようなものも多い。

モスクに入り見学する。靴を脱いで脱帽しての見学であるが女性は髪を見せないために脱帽せずに帽子のままでもよいという。むしろ帽子をかぶっていない女性は髪を隠すために備え付けのスカーフの着用が必要である。

モスクの中はひんやりと涼しい。メッカに向かって祭壇が用意されており、信者が絨毯に座ってお祈りをするようになっている。

土産物屋で買い物をして帰る途中で、街中のスピーカから流れる大きな声でお祈りが始まる。この国はイスラム教の国ということを知ることになる。

それにしても人口 100 万人弱のこんなに小さな島で、分断国家とはかわいそうである。いや、かわいそうと思うのは私の考えで実際はわからない。住んでいる人に聞き忘れた。

■風邪は大敵

キプロスからギリシャに向かう航海は天気も良く波もない。最高気温 23℃、最低気温 16℃ということでコンディションは最高だ。しかしながら私は喉風邪に苦しんでいる。

船内は私だけではなくエアコンによる乾燥と疲れから風邪をひいている人が多い。スタッフにもマスクをしている人も多い。そういえばビブリオバトルの担当スタッフが当日風邪でダウンして急きょ別のスタッフが慌てて対応していた。その彼がようやく回復してマスクをして表に出てきた時に聞いたが、窓のない部屋で 2 日間隔離されて気がめいったという。

一般スタッフやクルーは相部屋なので、同室の他のスタッフやクルーに風邪がうつると船の運航やイベントに支障がでるので別の部屋に隔離される。

海賊対策でカーテンを閉めているだけでも憂鬱なのに、一日中誰とも話をせずに病床で苦しむのはつらい。船の中は密室で感染が速いので当然かもしれない。

二つのことを思う。一つは体が資本ということ、そしてもう一つは外界との接触、刺激が必要ということ。こんな基本的なことを改めて感じる。理屈でわかるのと体験や状況下に置かれて感じるのでは全く違う。その二つを本当に大事にしたいと本気で思うようになる。

■お天とうさまは見ている

昼食時に H ちゃんという若い女性から声を掛けられる。既に知っている間柄なのだが、なんと彼女の母親は私が更新しているホームページを見ているという新情報を持ってきた。

ことの次第は、私たちの横浜出航を見送りに来てくれた T くんがその時に彼女の母親と偶然にも会ったという。実は彼らは親戚で、なんでこんなところにいるのということから、私の乗船やホームページの存在を知ったそうである。

人と人のつながりとは奇妙で、劇的で、面白い。

そしてそれは一方で、ブログにあげた部分を慌てて読み直すという作業になる。変なことは書いていないだろうなという心配が生まれる。

私の好きな言葉で「お天とうさまが見ている」や「お天とうさまに申し訳ない」という古い言い回しがある。キリスト教的な神様の加護の元にあるという意味よりももう少し日本的で、誰が見ているか分からないから悪いことはできないよという感じと思う。昨今インターネットで他人を誹謗中傷し、いい大人であるはずの政治家の失言などを聞くとまさしくこの言葉をかみしめてほしいと思う。おっと私がかみしめなくてはならない良い機会になる。

■サントリーニ島は別世界の美しさ

5 月 11 日エーゲ海に浮かぶ美しいサントリーニ島に寄港する。この島は小さい火山島で大型船は直接接岸できないので沖に停泊してテンダーボートで島まで乗客をピストン輸送する。オプションツアーには乗らずに自由行動をするので朝はゆっくり出発する。

この島は火山島で砂浜はなく急峻な断崖が海からそそり上げている。紀元前 1500 年に大噴火があり今の形になったというが、外輪山の半分と真ん中の火山が残っている形をしている。

100m くらいの断崖の上にレストランやお店など白い街並みがあるので、観光客はその断崖を登るのだが 3 つの方法がある。それはケーブルカー、徒歩、ロバであり、徒歩とロバは同じ階段を上る。私たちは往復で方法を変えようと思い、まずは楽なケーブルに 5 分ほど乗る。

断崖の上の部分にはいかにもエーゲ海という白い街並みで土産物屋、レストラン、ホテルなどどれもおしゃれなものばかりで、いかにも女の子が好きそうな感じの店が続く。上陸したのはフィラという街であるが人口は 1 万人くらい、1 時間もあれば簡単に一回りすることができる。それでも教会、病院、学校などのインフラ施設もある観光の町である。

白いおしゃれな街並みを歩き、歩き疲れたので断崖の街並みと海が見えるレストランに入り、トルコビールとトルココーヒーを注文する。ビールはもちろん生ビール、味は最高、何よりも景色がとても良い。

海には私たちが乗ってきた船以外に 4 隻の大型客船が係留している。私たちの船が 3.5 万トンで、他はみな 10 万トンくらいで、地中海のクルーズ船である。船のトップデッキのプールサイドに大きなアストロビジョンを装備したものまである。ここはクルーズの本場なのだ。

よく見ているとどの船はみな少しずつ動いており、微妙に動きながら旋回していることに気がつく。なぜ碇を降ろさないのかと考えるに、多分あのような断崖なので海底も深くて碇を降ろす水深でないか思う。



■カメラ破損！

街を歩いて、フィラの街の中心にあるオープンテラスのレストランに入る。

店員からムサカという現地料理を勧められる。この料理は日本で乗船前英会話教室の先生がお勧めと言っていたのを思い出したのですぐに注文する。ナスとジャガイモ、ミートソースたっぷりのパルメザンソースを重ね焼きしたラザリアのようなものでとても美味しい。

そして写真を撮ってもらおうと隣に座っている日本人観光客にお願いして、カメラを渡しシャッターを切ってからカメラを受け取ろうとした時にハプニングは発生した。受け取りでカメラを落としてしまった。

ズームレンズから落下して地面に当たったようで、ズーム機構が完全に壊れ再起不能になる。受け取りは双方のミスであるが、撮影を頼んだのは私である。落下は完全に事故であり、相手の

日本人を責めてもしょうがない。いや責めても戻ってくる訳ではなく、金銭的な弁償ならば海外旅行保険がしてくれる。問題はこれから私のこのカメラが使用できないことの方がはるかに大きい。妻の持っている小さなカメラ1台に託すしかない。

カメラを渡して撮影を依頼することは多くあり、このような事態も万が一として想定してはいたが、ここで経験するとは何ということだろう。運命のいたずらといえばそれまでだが、要は注意不足なのである。それにしても旅はまだ2ヵ月半も残っており、あまりに痛い。

■無賃乗車でアテネに行く

海賊対策で自衛艦との護衛合流時期が早まって一日予定が前倒しになり、ギリシャのピレウスに一日早く入港する。ここで2日滞在して従来との辻褄を合わすことになる。

のんびりと2日間ピレウスに居られる。通常の寄港は朝寄港して1時間後くらいに上陸許可があり、夜出航する1時間前くらいが帰船リミットになるのでせわしない。帰船リミットに遅れた場合は置いて行かれるということで、そんな人が地球一周クルーズでは何人かいるというので、帰船リミットにかなり余裕を見て戻るようにしている。したがって夕食前には戻ってくるという感じになる。

下船したところで居酒屋仲間数人と偶然一緒になり、行動を共にすることにする。

ピレウスはアテネの近くの港町で、アテネへの観光客が大型客船でここに到着する。大型客船は地中海クルーズ10万トンクラスの船で15階建てのビルのようなものである。そんな船とフェリーボートの基地がピレウスである。

ピレウスで考古学博物館見物後、私たち一行はバスでアテネを目指す。無謀にもお金の払い方を知らないでバス乗ってしまう。アテネ行きバスの番号だけはブンヤのOさんが調べており、バスが来たから飛び乗ってしまった。

バスの中では地元の年配おばさんが整理券のようなものを機械に通そうとしている。しかしながら、それがうまくできないようである。強く押してうまくいったようであるが、私たちにはその整理券なるものもない。車内でも販売しておらず、どこにも見当たらない。

しかしながら私たち一行の誰も気にしていない、何とかなるだろうという感覚である。これが1~2名の場合はどうしようと気をもむのであるが、日本人は集団になると強い。赤信号みんなで渡れば怖くないという漫才のネタを思い出す。

Oさんが運転手にどうやって払うのかを聞いてくれて、降りる時でいいということが分かり一安心する。バスに乗ること50分くらい、その整理券みたいなものを機械に通そうとする人もあまりいないことに気が付く、ほとんどの人はそのまま降りていく。

終点のアテネのシンタグマ広場に到着し、お金を払おうとすると運転手はいらないから降りろというジェスチャーをしている。まあ、払おうとしているのにいらないというのなら無賃乗車にはならないだろうと、結局無料で公共交通機関を利用する。

シンタグマ広場のカフェで昼食後、みんなと別れてパルテノン神殿に向かう。土産物屋が並び、石段を上がっていくとおしゃれなカフェの街並みが続く。

ベース、ギター、サクソ、アコーディオンのカルテットが演奏するギリシャ風の音楽が流れる。

この気候、この景色、そしてこの音楽はとても心地よい。人々は思い思いに語り合い、コーヒーやワインを飲みながら談笑している。みんな幸せそうに見える。がつつがつしていなのがギリシャなのだろう。

ギリシャ市内を一望するところにあるアクアポリスの丘に登り、パルテノン神殿に至る。

残念ながら神殿は修復中で足場が組まれて、クレーンが中にあり、本来の姿ではない。そういえば30年前にもここを訪れたがその時も修復中だった。平日の木曜日なのに修復工事をしている様子もなく、修復工事は本当に実施しているのか疑ってしまう。

パルテノン神殿の前で日本語をしゃべっていたら日本人ですかと声をかけられる。同じ船に乗ってきた人ではない。個人旅行でギリシャを旅行中という中高年の夫婦である。私たちが船で来たこと、地球一周の途中であることを話すと話がどんどん盛り上げる。どこを回ってきて、今度はどこへ行く、いつ帰国するかなど話す。

しかし、この夫婦の話を知ると、こちらがさらにびっくりする。パッケージツアーではなく全て個人で予約して旅をしているという。それは今回に限ったことではなく、いつもそうだという。団体旅行の制約がいやで自由に回りたいということである。予約はインターネットでして現地に来てからはつたない英語で聞きながら回ることは大変だけど面白いという。緊張感の中に得るものがあり、その国が少しでもわかるという。そんなことを淡々と話す。

バスの無賃乗車の話をする、この国の交通システムについて教えてもらう。

チケットはバス、トロリーバス、電車、地下鉄で共通で、90分間有効と24時間有効の2種類がある。どちらも初乗りの時にその時刻の刻印をするようになっており、それがチケットの開始時刻になる。

その有効期限が切れるまで刻印や改札などは不要という。乗客はそのチケットを見せる必要もなく、そのままバスや電車に乗って降りることができる。ただし時々検札があつて所持または期限切れが発覚するとバカ高い罰金をはらうことになるので注意した方がよいという。

この話を聞いて午前中のバスの無賃乗車が理解できた。整理券みたいなものが切符で、刻印をする機械に通していたのだろう。

そして私たち一行が無賃乗車できた理由も、運転手が払わなくてよいと言った理由もわかった。運転手は運転する人で料金回収する人ではないからだろう。

こんなことをやっているからギリシャは赤字国家なのだろうと思わないでもないが、このシステムは人間の性善説に立脚しており意外に面白く思える。

日本のような自動改札機など使うことなく自動改札になっている。何もかぎす必要もなくゲートもないので自由に開放的に感じる。このシステムを私は性善説立脚自動改札システムと呼ぶことにしよう。

日本人それも私のような技術者はどうしたら取りっぱぐれない仕組みになるかとの観点しか見えなくなり、結果あの自動改札機とICカードになったと思う。発想が全く性悪説である。

この違いは一体なぜだろう。一年中温暖な気候風土に生まれ人生を楽しむことをモットーにしているからなのか。社会や人生をより効率的にと目標を置いている日本の多くの企業、日本の国民性なのか。この違いは何か。実に面白いことに会う、だから旅は面白い。

■ギリシャは遺跡が似合う？

ピレウスでの一泊はとても楽に感じる。ちょうど日帰り旅行ばかりしている人が一泊旅行をしたようなものなのだろうか、せわしなさがなくて良い。

アテネといえばオリンピック発祥の地で、古代オリンピック会場に行く観光客は多いが、私たちはあえて2004年のアテネオリンピック会場を訪れる。アテネ中心地から地下鉄で30分弱、その会場は地下鉄駅と直結されており、陸上競技場、プール、サッカー場、体育館などが集まっている。

地下鉄を降りると人はほとんどいなく、閑散としている。広い会場は建物やポール、アーチ状のオブジェ、敷き詰められた石は皆白く、昼間の太陽と青空とのコントラストはいかにもギリシャというのが全体的な印象である。しかし実際に会場内を歩くと印象が変わる。

施設はほとんど使用されていないのか落書きや雑草も多く見受けられ、まるで廃墟のようである。唯一サブプールだけは水がはられて数人が泳いでいる。しかし、あの北島康介が金メダルを取ったメインプールは使用されている形跡がなく、木や草が生えて、ベンチは一部分壊れている。Panasonic のロゴが入った大型ビジョンも何ともさみしい。まるでアクロポリスの丘にあるパルテノン神殿のように見える。

誰もいない会場を夫婦で歩き、陸上競技場の前で記念撮影をする。ここはオリンピックのメイン会場で開会式や閉会式の会場にもなったはず、当時は大賑わいをしていたのが信じられない。

なぜ使用しないのか、よくわからない。つい十数年前の施設群が地中海の青空とマッチングして遺跡化している。この国は昔から遺跡を作ることに関して秀でているかもしれない。

東京オリンピックの施設は大丈夫かと、いらぬ心配をしてしまう。



■スリに会う

帰りの地下鉄は混んでいる。やっと地下鉄を降りると、妻がカバンのチャックを開けられて物色されたという。幸いにして被害はなかったが、あまり良い気持ちはしない。スリが多いという情報はあったがつつい用心を忘れていた自分たちに気がつく。

船に戻ってサウナに行く。サウナは私の貴重な情報源である。高温のサウナ室の閉空間に2~3

人でいるとあまり物事が考えられなくなり、人間性がオープンになるようで様々な情報がここで得られる。ピースボートやジャパングレイスの運営のこと、スタッフのこと、船内での過ごし方、ご法度事項、中には船内恋愛情報まで千差万別である。

いつもの顔なじみが、今日は気持ちが滅入っているという。聞くと、いや聞かなくとも先方からどんどん話してくる。本日、彼はアテネで置き引きに会ったという。散策をして少し疲れたので腰をおろしてカメラを首から外して横に置いて煙草に火をつけた。そうしたら近くに座っていた日本人旅行者の若い女の子が、あの人がカメラを持って行ったと教えてくれたという。しかしその犯人らしき者は既に赤信号を横断して逃げ去ったという。

カメラは買い換えたばかりの一眼レフで高価なものらしい。私のカメラとは一桁高いようだが、問題はメモリーカードごと盗まれたので撮影したデータもなくなったというから泣きっ面に蜂とはまさにこのことである。

彼は旅のベテランであるが、うっかりミスをしたそんな自分に悔いている。人生何があるかわからない。この失敗を糧に彼は二度と同じようなミスはしなくなるだろう。それにしても高い勉強料である。

私は励ます言葉もなく、自分のカメラ落下事故についても触れずに、ただ聞き役に回るのが精いっぱいであった。

温暖な気候でおおらかな人柄というギリシャの人々の印象が少し崩れていくのが何故かもったいない気がする。日本を訪れる外国人には親切にしたいとつくづく思う。

■カメラ購入を断念

一台破損したのでここギリシャでカメラを買おうとして電気店に立ち寄る。日本でいうヨドバシカメラを小さくしたような店で、一通りの品揃いがある。ニコンやソニー、パナソニックなど日本の慣れ親しんだブランドばかりである。この分野は日本製品の独壇場らしい。

一番安いので59ユーロということで8000円程度なのでこれにしようかと思ったが、隣に防水、耐ショックのカメラが150ユーロである。

こちらの方が落としても衝撃に強いので二度と同じことをしないためにはこちらを買おうと手に取って電源を入れてみると幸いにも電源が入り試し撮りをする。撮った写真をチェックして消去しようとしたところ、大変なことに気が付く。ツマミや表示は絵文字なので万国共通でわかりやすいが、「消去は一枚ですか」、「複数枚ですか」などという文字が全てギリシャ文字になっている。とても使いこなせないことが分かり、店を出る。そうかここはギリシャなのだということを改めて実感する。

あとで思ったが、カメラを買っていれば良かったかもしれない。カメラを使用する時にギリシャ文字を見れば落下事故を思い出し、二度と同じ過ちを繰り返さないという戒めに来ることができたかもしれない。

■ギリシャの知り合い

ピレウス散策中にスーパーマーケットがあり、入ると日本の味噌や醤油お好み焼きのおたふくソースまで日本食用に食材が並んでいる。私の感覚ではいわゆるスーパーマーケットというのは食品の他に衣類なども置いているが、ここピレウスでは食品の店、衣料の店とか別々のようであ

る。そしてここは食品マーケットである。

この店の日本食品を珍しそうに眺めて店を出ようとする一人の日本人の年配のご婦人が入ってきた。こんにちはと日本語で挨拶すると驚いたようで、船で旅行中とうことなど話をすると彼女は46年前に日本からやってきてここギリシャに定住しているという。ギリシャは気候や人々の気持ちが良い、日本食品も手に入るのに住みやすいという。

実は妻の知り合いも同じくギリシャ人と結婚して移り住んだ人がいて、ギリシャが気に入って日本には帰らないということをお話すと話題が一気にその知り合いのことになり、調べてみるという。ギリシャで暮らす日本人は横のつながりがあるようで比較的簡単にわかるらしい。遠いギリシャの地にいる同じ日本人だから仲間意識見たいなものであろう。

妻の知り合いとは妻の両親が媒酌人をやった夫婦の娘ということで、私は全くわからないが妻の家とは親しくしていたようだ。妻はこの船旅用に作成した名刺に旧姓を書き添えて彼女に渡す。彼女は72才、そんな年には見えないのはオリーブオイルの成果かもしれない。

このギリシャの地で偶然にも定住日本人と遭遇し、アドレス交換までするとは思わなかった。旅は偶然の重なりである。だから旅は面白い。

第二章 地中海

■地中海を楽しむ

しばらく寄港が重なり日常ルーティンをしていなかったの朝からウォーキングをしようとデッキに出るが、少し雨が降っているのであきらめる。今日はのんびりしよう。

この船は地球一周だけではなくフライト&クルーズという飛行機を利用して地球一周の一部を楽しもうという企画旅行もしている。106日は長いけど1か月くらい、しかもハイライトのヨーロッパなら行きたいという需要があるようで160人もピレウスで乗り込んできた。

ここからアイスランドまで一緒に旅することになる。そんな人たちと食事や共有スペースで会うのだが、会社に新入社員が入ってきたときのようで初々しい。彼らにいろいろ教えている人も多い。わずかに1か月早く乗船しているだけで何でも知っているかのように先輩風を吹かせたくなるのだから人間は見栄の動物である。

風邪が流行っていることは以前にも書いたが、インフルエンザなど隔離が必要な場合は隔離される人も出ている。一人部屋あるいは夫婦で一室などは別として隔離するための隔離部屋の使用料は一日11000円取られるということが情報として入ってきた。

この使用料はやり過ぎの感があるが、病院の個室使用料と考えればと思うしかない。

日本のミュージシャン2名がギリシャから乗船してきたので、今夜は初めてのライブが行われる。女性ボーカルと男性ギタリスト、二人とも海外で活躍するミュージシャンで名前は初めて聞くが実力はありそうだ。

オリジナル曲からライブが始まり、最後のアンコール曲は明日シチリア島入港ということでゴットファーザーのテーマ曲で締めくくる。最後のアンコールをしようとせずに帰る人も多くいて、ちょっと解せない。このようなエンターテインメントに慣れておらず、アンコールというものを知らないのだろう。諸先輩方にそんなことを教えるのはあまりの恐れ多いが、この旅行記を読んでいたら気が付いてほしいと思う。アンコールをするのはエチケットでもあると。

音楽はというとギタリストのテクニックがすごい。以前に乗ったショートクルーズでも同じようなシーンがあったような気がするが、その時もギタリストのテクニックに驚嘆したことを覚えている。

今回のギタリストは 12 弦ギターとクラシックギターを使い地中海音楽やラテン音楽をうまく操っている。

もう一つ楽器の面白いエピソードがある。昨日ギリシャで地元の楽器を購入したのでその楽器で一曲弾いてくれた。買ったばかりの民族楽器を翌日の舞台上で披露できるとはただものではない。

その楽器はインドのシュタールのような音色で、世界の弦楽器のもとになったという説明である。それはギリシャという地が西洋と東洋の間に位置するという特性からギターなどが東に伝わり三味線などになったという。その真意はともかくも、みんな納得しているからすごい。

■シチリア島を散策

イタリアのシチリア島のカタニアに入港する。私たち夫婦は 3 カ月前にもイタリアに来ており、おおよその観光地は既にまわっているが、ここシチリア島は初めての体験になる。

3 カ月前は冬だったが、今は春から初夏で過ごしやすい気候ではある。さらに容赦なく照りつける地中海の日差しはもう夏のように暑い、日陰を歩くと適度な風がさわやかで心地よい。

カタニアは 30 万人の都市で、ドゥオーモと呼ばれる大聖堂を中心に街が広がっている。イタリアでは大聖堂をドゥオーモと呼ばれているが、この呼び方も感覚的には 3 カ月前の経験から違和感がない。

港から観光名所の多くは歩いてまわれるので、勝手気まま自由行動で街に繰り出す。

イタリアは南に来るにつれて、街の落書きやゴミが多くなることを経験値で知っていたが、ここシチリア島も案の定である。車も道路の端に駐車というよりも勝手に置いている感じで、車も汚い。それでもナポリより綺麗かもしれない。

レストランに入り、パスタ・ノルマという美味しいという評判料理を注文する。パスタの上にトマト、ナスがのって、一番上に羊の乳から作ったリコッタチーズがかかっている。味は少し塩気がつく、それなりには食べられるが絶賛するというものでもない。量もやや多いので中高年の日本人が一人前食べるのは大変である。むしろ付け出しで出てきたオリーブオイルに絡めた 1cm 角のトマトをパンの上に載せただけの料理がとても美味しい。

3 カ月前もそうであったが、イタリア人の食事は炭水化物のオンパレードである。

■夜の航海を楽しむ

カタニア港を 16 時に出航する。日の入りは 20 時頃なのでまだまだ明るい。これからどんどん日の入りが遅くなる。昨夜のライブの女性ボーカルの話では、ギリシャ人の日常は 17 時頃に昼食

が終わり、夕食が終わるのは夜中 2 時、3 時とのこと。ギリシャの隣のここイタリアもきっと同じようなものかと思う。

確かに夜 8 時の明るさからするととても寝る気持ちにはならず、これから遊ぼうと思うのは当たり前かもしれない。さすがイタリア、日本とは環境が違う。だから国民性も違うのだ。

メッシナ海峡に向かう。この海峡はシチリア島とイタリア半島との間の海峡で幅はわずかに 3km しかない。イタリア半島はその形から長靴に例えられるが、シチリア島は長靴のつま先にある小石のようなもので、メッシナ海峡はその長靴と小石の間に位置する。

海峡を挟んで右側がイタリア半島で、こちら側の方が賑わっていて建物が多い。街並みもはっきりと見える。

この海峡の通過は日没とほぼ同じ頃で、暮れなずむ海峡に航跡が淡く消えていく。なんともロマンティックな光景である。そして船はティレニア海に入る。

このティレニア海に火山島として有名で今も噴煙をあげているストロンボリ島がある。ストロンボリ式噴火という言葉まであり、辞書によれば溶岩や火山弾を周期的に空中に放出する噴火を意味していて、日本では伊豆大島で見られるという。この火山は夜赤い炎が見えるので昔からティレニア海の灯台の役割をしていたという。

船は島を回って西へ進路をとるというので 11 時頃まで居酒屋で飲みながらその赤い炎を見ようと頑張る。頑張るといっても飲みながら定期的に誰かが哨戒をするだけである。すると一番若い G ちゃんが速足でやってきて、雲がかかっているがわずかに赤い炎のようなものが見える時があるという。私も早速行ってみるが残念ながら見るができない。

■女性の品格とは

ゲストで昭和大学学長の坂東真理子さんがヨーロッパから乗船したので本日は初講演があり、早速聞きに行く。満員で立ち見もあるので 600 人以上も入っており、大そうな人気である。

坂東真理子さんは「女性の品格」という本がベストセラーになり有名になる。本の執筆が大好きで「女性の品格」の前に 32 冊出したそうで、33 冊目が売れたという。ベストセラーを書くコツを 32 冊であきらめないことと言うと、会場は大うけである。

元公務員でいろいろな要職についていたという経歴を自己紹介し、本の内容の講演が始まる。私はこの本を読んでいないが、女性の品格とは装い、言葉、振る舞いがかもし出すものだそう。いろいろな例をあげながら、それらの質を上げていくことが品格につながるという。女性だけでなく、男性についても触れている。

最後に品格が最も無いのは、短期リターンを求めることだという言葉で講演を結ぶ。

しかし、司会者からは坂東さんに写真やサインを求める場合は、本を買った方のみに限定する旨の注意事項がある。これこそ短期リターンのような気がする。それを聞いて私は急激にさめてしまったことに気が付く。

そもそも文化人、作家というものは自分のファンをどれだけ作れるか、それも長い時間をかけてというものであると思う。この狭い船の中、レストランやバーで同席することもあるので気楽に声をかけ写真を撮るくらいのことを許さないようではファンができない。幻滅したのは私だけ

だろか。

講演を再後部で聞いていたが、私の周辺の聴衆の7割くらいは寝ている。残り3割は普通に聞いている人、メモを取りながら聞いている人、そして私のすぐ隣の人は声を出して相槌を打ちながら聞いているのでうるさくてしょうがない。聴衆の品格というのも考えなければならない。

■スタッフの人生はすさまじい

ピースボートのスタッフを紹介する「徹子の部屋」的トークショー企画が開催されており、今日も2名のスタッフの紹介が各30分ずつ行われる。

若い女性スタッフの紹介では、高校を卒業し歌手になろうと夢みて上京し専門学校に通う。しかし日本以外を知らなかったことが異文化との交流を試みたくなりこの船に乗って南半球の地球一周をしてから、人との交流に目覚めて今の仕事に就いた。高校時代はどちらかというと不登校に近く、なんとか卒業したという。

画一的な今の日本の教育システムに馴染めないでこの船に乗ってから人生が変わったという。そういう経験の人は結構多い。

一般社会では上から命令されてことを忠実に効率よくこなすことが良とされるが、この船では少ない若者が力を合わせて、船の行事を企画し盛り上げていくという。だから仲間意識が高まり自分たちで始め、問題があれば自分たちで解決するというスタイルになる。30代40代の社会の働き盛りはほとんどいないので上司がいない。年配の方々つまり人生のベテランたちは上司ではなく友達的な存在である。

そこに地球一周という舞台があり、外国人というスパイスも微妙に効いている。さらに食と住と安全は保障されていて、終電がある訳ではない1000人の村なのだから何かにつまずいた人々には再生のきっかけになるのかもしれない。

もう一人は温泉、山登り大好きなオーストラリア人で、以前温泉の話で私と盛り上がったことのある彼である。

オーストラリアの小学校4年生の時に日本語と出会う。アルファベットでない文字があることに驚いたという。以後オーストラリアで大学まで日本語を勉強して、英語の教師と観光親善大使で高知県に赴任し高知に4年、東京に8年住んだが、高知が気に入っているという。高知のおおらかなところが自分にフィットしており第二の故郷としているという。

実はこのトークショーで、彼は同性愛者というカミングアウトをする。私は温泉友達として今まさに驚いているが、高知の人々はおおらかにそれを受け入れてくれたという。確かに高知の人は豪快で大酒のみで、おおらかなで懐は深い。だから坂本龍馬を輩出して明治維新を成し遂げたのも理解できる。

高知県庁の職員官舎は結婚していないと入れないとのことで同性パートナーとの同居は前例がないということで認めていなかったが、県庁の部長が前例を無視して認めてくれたというエピソードはそれを物語っている。

これも彼の人間性やボランティア活動が認められたからであろう。ボランティア活動による収益で毎年1名ずつ日本の学生をオーストラリアに派遣しているという。

この船にはいろんな人が乗っている。特にスタッフはみな誰もがとんでもない人生歩んでいる。

■18年ぶりのスペイン上陸

スペインのアンダルシア地方の小さな港町モリトルに寄港する。ここから有名なアルハンブラ宮殿まで車で一時間という場所で、多くの人々はアルハンブラ宮殿に行く。ただ私たちは18年前に訪れたこともあるので、今回はのんびりとこの小さな港町を散策する。

港から町の中心まで少し離れており、シャトルバスで約15分という距離になる。港町なので山が近くに迫ってきており、その山の稜線には風力発電の風車が30基くらい横に並んでいる。そしてその山の奥には高い山が見えており、雪がまだ残っている。

港の出口でバスを待っていると何台もの車が港まで進んでいく。リゾートの乗用車もあれば貨物を乗せたトラックなど様々である。

ここからアフリカのモロッコまでフェリーで4時間、7000円という。これからアフリカに渡る車を見ているのかと思うと、思えば遠くに来たものだと感じてしまう。

モリトルの街はきれいだ。南国のリゾート地という感じで青い空と白い街並み、フェニックスと色とりどりの花がマッチしている。

街の入り口に観光案内所があり、その近くに教会があるので普通は最初にその教会を訪れる。教会には親切なボランティアらしいおじさんがいて、人なつっこく話しかけてくる。その話しかけられることが何となく気持ちよくて、とても安心する。

教会は拝観料の類はなく、祀っている金ピカなマリアとキリストの像を間近に見ることができる。その素晴らしさと無料というのに感動する。

街のカフェで食事とする。パエリアを頼んだつもりなのにオーダーが入っていないらしく、ビールとワインそしてサラダとパンとウイナーソーセージでの昼食になる。

ウイナーソーセージが非常に面白い形で出てくる。豚の形をしたBBQ容器のようにウイナーソーセージが2つほど乗っており、下にオリーブオイルのような液体が敷いてあって、そこに火をつけてウイナーソーセージを焼くというものでとても面白い。そして美味しい。容器の豚の顔が愛らしく、見ることも焼くことも食べることも味わえる。パエリアが食べられなかったことは残念だが、この豚ウイナーソーセージと出会ったことは感激である。



午後 2 時半、スペインの子供たちが学校から帰る。小学生には親が迎えにきて、中高校生は友人たちと帰宅する。そんな姿を見ながら昼間からビールをのんびり飲んでいる。今までの私では、全く体験できない光景である。

食事をとったあと買い物をしようと街を歩くがシエスタと呼ばれる昼寝時間に入っているので店は開いていない。夕方にならないと開かないらしい。これもスペインなのだろう。

本日の日の入り時刻は 21 時 17 分という信じられない時刻になっている。毎日のように日の入りの時間が延びている。これは夏至に近づいていて北上しているのと、時差調整のないまま西に向かっているのと、サマータイムによるものと思われる。

■ジブラルタル海峡

5 月 19 日ジブラルタル海峡を日の出後に通過する。この海峡は地中海と大西洋を隔てるものであり、ヨーロッパとアフリカ大陸が最短で 14km まで接近する。左舷にアフリカ大陸、右舷にヨーロッパを見ながらの通過であるが、どちらの景色も岩の山である。その殺風景なところは紅海でみた岩の島にも似ているが、もっと断崖は急峻で厳しい。

この海峡の名前でもあるジブラルタルとは、ヨーロッパ側に突き出ている半島でジブラルタル石灰岩の岩山のことで、砂州で結ばれている。

ここはスペインではなく英国領である。交通の要所ということは軍事的にも重要地点であり、大昔からここは争いの場だったらしい。現在も英国の海軍基地がおかれ島ごと要塞化されている。

ヨーロッパ側から大きなフェリーボートがアフリカを目指して海峡を横断してくる。ちょうど私たちの船の航跡を横切るのだが、あまり見かけない光景である。

乗船客はみんなカメラ片手にデッキに上ってくるが、風が強くて寒い。気温は 14℃を超えたくらいだが、強風のせいで体感気温はかなり低い。

これからは大西洋の船旅になる。

第三章 大西洋

■困ったおばさん

いよいよ大西洋まで来たが、そんなことはお構いなく船の生活は続く。食事の時に同席したおばさんの話である。

最初の話題は卓球の話である。ところが私が旅のチカラ研究所の名札をしているのを見た隣に座っていた人がその内容について質問してくるので答えていると、話題がスポーツの話から旅の話になった。そうしたら強引に問題のおばさんが自分の話に持っていかうとしてくる。

シルクロードの旅を 20 年前からやっていて、シルクが何だとか、旅行企画が何だとかと聞いてもいないことを誇らしげに話してくる。私も含め周りの人たちも誰も何も聞いていないが、すごいだろうという表情で話をしてくる。一般常識としてすごいですねと相槌を打つとさらにいろんなことをこれでもかこれでもかと話してくる。私も妻も周りの人もうんざりしているが、本人は

お構いなしである。

実はこんな人は日常でも結構見かけるが、旅行中の場合は特に目につく。要はこの船旅というのは友達作りの場でもあるが、その友達作りから自分の売り込みの場に変化する人が時々いる。

そういえば、この地球一周クルーズが何回目だとか、聞いてもいないのに話してくる。そして私はすごいよということと言外に匂わせるのである。そしてそんな人はこの船しか乗った経験がなく、他の日本船や海外クルーズ船を経験したことがない人が多い。女性、それも年配者にその傾向が強い。

人のふり見て我がふり直せというが、私も気をつけないといけない。

■ 壮絶な半生

本日もスタッフ 2 名、通訳の女性と英会話の先生 2 名の紹介トークショーを聞く。

通訳の彼女はハーフでバイリンガルである。家では英語、学校では日本語を話して育ったという。ダンスが好きであらゆるダンスをこなして先日のスエズ運河通過時にはベリーダンスをやっていた。ベリーダンス歴は 1 年である。

大学はロンドン大学と上智大学へ行き、国際学科で文化人類学を学んだという。上智大学の夏休みにネパールの孤児院で 1 カ月のボランティアを経験したそうで、理由は文化人類学を学ぶための下地と社会貢献だそうである。今、彼女の悩みは英語も日本語も中途半端なのでどちらも極めたい。そして極めるために 9 月から英国の大学院に行くとのことである。

この若者からこんな挑戦の大切さを学ぶとは思わなかった。

次は韓国人の英会話の先生である。韓国で英語の教師をしていたが、縁あってこの船のことを紹介されて初めて日本を訪れて横浜から乗ったそうである。それでも日本語が少しわかるようになってきているからすごい。

英語以外に音楽などいろんなことをやっていたことの紹介であったが、最も印象に残ったことは一枚の写真である。それは軍隊の写真で、韓国の徴兵制に話が及ぶ。韓国では 2 年間の徴兵訓練を 30 才までに経験しないと逮捕されるという。自分の体力や精神力の限界を知るには良い機会であるが、20 代の若者にとって 2 年間はいろいろ学ぶ時期であり非常にもったいないと思っているという。

徴兵経験者の生の声を聴くのは初めてであり、興味深い。2 年あったら相当なことができるという意味にもとれる。そして軍隊とは何か、限界を知るところなのか。

■ ユーラシア大陸最西端

5 月 20 日ポルトガルリスボンに入港する。ヨーロッパに入りキプロス以外は既に訪問経験があるが、ポルトガルは初めてである。今回はユーラシア大陸最西端のロカ岬に行くのが目的で、自由行動で行くと帰船リミットに間に合うか心配なので、オプションツアーに乗りロカ岬を目指す。

ロカ岬の前にリスボンの車窓からの市内観光を行う。車窓からとはいえリスボンは綺麗で、落ち着きを感じられる。さすがに大航海時代のポルトガルの都である。5 月の青空と澄んだ空気、そして木々の緑に調和して、石造りの街がはえる。ところどころに広場やモニュメントがあり、

それも決して大きくないのに雄大に見えるから不思議である。これが世界を制した国なのだろう。

日本に鉄砲やキリスト教を伝えたのが遥かユーラシア大陸の西の果てのこのポルトガルで、それも今から 500 年以上も前の話である。当時はどのくらいかかったのだろうか、一年以上はかかりそうである。何しろスエズ運河がなかったのでアフリカ南端を回る必要がある。私たちは 1 カ月でここに立っている。

ロカ岬にはリスボンからバスで 1 時間足らずで来てしまう。ところがもう少しでロカ岬というところでいきなり霧が立ち込める。ガイドの話ではこの岬ではいつのことというが、先ほどまで晴れていて、いきなり霧である。正確に言えばロカ岬だけが霧の中にある。

駐車場には観光バスがたくさん来ている。JTB や阪急交通社などのお馴染みのブランドのバスツアーもいる。

霧で全景はわからないが、灯台の先に高さ 10m ほどのモニュメントがある。てっぺんに十字のマークがあり、これがロカ岬の証らしい。まずは記念写真を撮り周りを散策していると霧が少し晴れてきたので海のある方角に柵があり、その向こうを見ると高さ 50m はありそうな断崖絶壁で下はエメラルドグリーンに近い青い海と白い波が見える。



■ポルトガルは実に面白い

世界遺産の街、シントラを見学する。避暑地ということで街は綺麗で、白い壁と茶色の屋根が印象的で、屋根は瓦のようなものでできている。その形が沖縄の家のような感じであるが、もっと近代的で 2 階建ての家が多い。

さらに各家には煙突が必ずある。台所のかまどではないだろう、という暖炉に違いない。避暑地ということは、冬はそれなりに寒いに違いない。

それにしてもリスボンの街といい、シントラの街といい、日本に比べて裕福である。ガイドの話では大卒の初任給が10万円くらいということで、他のヨーロッパ諸国に比べて貧乏ということであるが、そんな感じはしない。確かに統計的な数字では貧しいかもしれないが、街の雰囲気や人々の営みはとても幸せそうで裕福に見える。この国の人々に比べてアクセク働いている日本人は一体何をしていたのだろうかと考えてしまう。

シントラの街で最も有名なペナ宮殿を見る。特徴的な外観は2本の煙突が出ていることである。宮殿内に入りわかったことは、この煙突はまさしく台所の排煙のためのもので、そして各部屋は権威を表す紋章や平和への祈りというようにいくつかのテーマで部屋の装飾が異なり多くの部屋がある。

ムーア人というイスラム教徒の侵略によりここポルトガルやスペインはイスラム教徒に支配された時があったが、レコンキスタと呼ばれるキリスト教徒による国土回復運動によりキリスト教徒が奪還する。そしてムーア人が作った城砦を宮殿に改造したそう。

スペインもポルトガルもイスラム教徒に侵略された歴史を持っている。その2カ国がそのあとの大航海時代の主役になるとは歴史とは面白い。

リスボンのテージョ川の沿岸のジェロニモス修道院に行く。川というよりは河口なのでほとんどは海と言った方がよい。この修道院のそばまでその川岸だったそうで、地震で津波が建物の3mくらいまで浸かったという跡がある。まるで日本のようであるが、この建物が石でできているので倒壊はなかった。

この建物も大航海時代の偉業に敬意を表して作られたということであるが、とにかく大きい。大きいだけでなく細部にわたり彫刻やステンドグラスなどの装飾がふんだんにある。大航海時代というのは相当儲かったに違いない。

この建物の中にはあの有名なバスコ・ダ・ガマの棺がある。棺はもちろん石棺であり、棺の上にバスコ・ダ・ガマが手を真ん中で合唱して仰向きに寝ている石象が置かれている。その他にも10人くらいの棺がいろんな形でおかれている。

建物の中は広く、そして高い。上から見ると十字架の形をしている。

橋がテージョ川にかかる大きな橋がある。名前が4月25日橋といい、革命の記念日にちなみ名づけられてとこのことであるが、なんと私たちの結婚記念日と同じ日である。早速、橋をバックに記念撮影をする。

結婚とは人生の墓場とか言う人もいるが、本当のところ結婚は人生の革命かもしれない。それは本人たちにとっても両家にとっても、その時から人生が一変する。

■ポルトガルの歴史は複雑だ

ここポルトガルの歴史は複雑だ、侵入や征服の繰り返しである。ヨーロッパの国々はみな同じようなものではあるが、ポルトガルは日本とも関係が深いのでちょっと探してみる。

温暖な気候なので紀元前から発展して、まずは古代ローマの支配を受け、支配はローマ帝国へ

と続く。そして 5 世紀にはゲルマン民族の侵入を受け、8 世紀からはイスラム教徒の支配化になる。この時に隣のスペインではイスラム建築の傑作アルハンブラ宮殿ができる。スペインでもポルトガルでもその後にキリスト教徒によるレコンキスタが起き 13 世紀にはほぼ回復した。それでも足掛け 500 年くらいかかっている。スペインが回復するのはその 100 年後という。

そして 15 世紀から海上交易に進出して有名なバスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を回りインドまで行き交易の礎を築く。それが 1499 年で、そこから大航海時代を迎え、船でアジアの香辛料などを入手することにより未曾有の繁栄をする。それが日本まで鉄砲やキリスト教を伝えることにもなる。ポルトガルは侵略される側から今度は侵略する側に回り、ブラジルも植民地化して黄金時代を迎える。

しかし 16 世紀には衰退し、スペインに併合される。そしてスペインの無敵艦隊がイギリスに破れ、スペインの没落に乗じて、また独立するが 19 世紀初めにフランスのナポレオンに侵攻される。

その後、内乱が起きて王政から共和制へ、さらに独裁政治、そして 1974 年に革命により現在に至る。

私にはこの歴史をうまく受け止められない。他民族、それも他宗教からの支配を受けるということがピンとこない。日本は侵略した歴史はあるが侵略された歴史がないから当然かもしれない。

リスボンを出航する。先ほどまで晴れていたが、急に霧がでてきて濃霧の航行となる。ロカ岬に行った時と同じようである。いきなりの天候急変で波が大きく、揺れがひどくなる。船は衝突を恐れて盛んに汽笛を鳴らしている。

後で聞いた話では濃霧の時は短音の汽笛を 2 分間に一回ならすのが習わしだそうである。ブリッジで右往左往して、やみくもに鳴らしているのではないらしい。

大西洋とはこのような天候のところなのか、この海から大航海時代は皆旅立っていったのか。勇気や使命感だけではなく、成功や物欲も複雑に交錯していたのだろう。そうでないとこの怖い海へ出航できないと私は思う。

■文化人とは人を幸せにする

8 階の共有エリアでポルトガルから乗船してきた料理研究家の枝元なほみさんと出会う。たまたまパソコンをしていたら近くのテーブルに座ったので、妻が半ば強引に話をしに行く。

気さくで、優しい感じがする人でかざりつけのない人柄というのが第一印象である。早速、妻との写真をお願いすると快く応じてくれる。先日まで乗っていた品格の人とは雲泥の差である。

なんと 4 月 12 日は横浜で仕事があり、この船の出航を見送ってくれたという。まあ本人はここで乗船するのが決まっていたからかもしれないが、あの出航の裏にまた一つの物語を見る。

妻は機嫌が良くなり、充実した一日がおくれそうとのことである。ここ数日は風邪をひいているのでふさぎ込んでいたのがうそのようである。文化人の仕事とは人を幸せにすることと思うがまさしく今ひとりの人間を幸せにしている。人生は気持ち次第というものわかる。

午後、枝元さんの紹介イベントがあるので顔を出す。司会者がひととおりの紹介をして彼女に質問をする。いままで旅した日本や世界の中で一番美味しい料理は何ですかという質問に彼女の答えは面白い。

美味しいというのは複合的で、人の置かれた状況により大きく変化するという。そんな前置きをしたあとで、ネパールの寒い朝に小さな食堂でいただいたトマトスープだという。とにかく寒いので、スープに救われたという。

サウナの後のビールが格別うまく感じるのと同じということであろう。私が毎年行っている厳冬期の猪苗代湖の極寒キャンプで食べるキムチ鍋やホットワインが美味しいのはこの感覚である。だから、いろいろな経験するほど美味しいものが増えてくるということであろう。

美味しいという言葉は食べ物に対する感激とすると、人生そのものに対する感激は幸せという言葉に置き換えられると思う。変化に富んだいろいろな経験をしている人生をおくる人ほど幸せが実感できるのかもしれない。ただ人生において変化に富むというのは失業したり就職したり、倒産したり成功したりと大変なので、日常生活では挑戦や頑張りに変化を求める。非日常という意味での変化は、旅がかなえてくれるということになる。

そんなことを考えると妙に納得する。私も少し救われた気分になる。

■納豆は最強

大西洋に入ってから天候不順が続き、昨日も雨で期待していた **BBQ** が中止になり本日も朝は雨である。そして徐々に寒くなってきており、船内ではダウンジャケットを着ている人も見かける。地中海性気候というのは確かに温暖で雨が少ないというのを改めて感じる。

それにしても緯度がどんどん高くなってきており、本日の日の入りは **22時** である。

枝元さんの講演を聞く。納豆、タコ、ユリ根が題材であるが、納豆菌についての興味深い情報を聞く。

納豆菌は体に良い菌で他の雑菌に比べて強く、例えば **O-157** のベロ毒素と納豆菌を 1 対 1 で戦わせたら、**100%** の確率で納豆菌が勝つという。

ベロ毒素と納豆菌とをどのように戦わせるのか私には全くかわからないが、とにかく納豆菌は強くて体に良いらしい。彼女は今回の旅に乾燥納豆を胃薬の代わりに持ってきているという。

そしてタコの話、タコは簡単にゆでて塩をふって食べるのが一番美味しいという。要は素材の良さを引き出すことだそうだ。そのためにはゆでる温度や時間が勝負になるのだろう。当たり前のことであるが料理研究家が言うとなぜか重みが違う。

■モン・シャン・ミッシェル

フランスのル・アーブルに寄港し、世界遺産のモン・シャン・ミッシェルに行くオプションツアーに乗る。

高速道路を 2 時間半ほどで到着するが、途中の景色は田園風景で新緑がとても綺麗で素晴らしい。日本と違って山がなく延々と広陵地帯が続き、ところどころに集落があり羊と牛が放牧されている。

フランスの国土は日本の **1.5 倍** で、人口は日本の半分なのでゆったりしていることはわかるが、さらに日本は国土の **80%** が山なのに比べてフランスは今日見た限りはほとんど平野である。先進国ではあるが農業国という姿も理解できる。ポルトガルに比べてもさらに裕福に見える。フラン

スならば当たり前か、それにしてもこの裕福さは一体何のだろうか。

島に行く前にレストランで昼食である。レストランからはモン・シャン・ミッシェルが目の前に見えるベストロケーションである。

この地はオムレツが名物料理ということで食事の一皿目がオムレツである。修道院までたどり着くのが大変な時代に、ようやくたどり着いた人に与える食事がタンパク質たっぷりで消化の良いオムレツということで名物になったようである。

船の説明会ではこのオムレツについては味がないのであまり美味しくないという評価であったが、どうしてどうして充分にいける。確かに味がほとんどなく、卵焼きと生クリームだけの素朴な味であるが、私も妻も同席したみんなも満足している。

モン・シャン・ミッシェルに着いたが、バスはこの島に直接乗り入れられないのでシャトルバスに乗る。このバスが面白い。ピストン輸送するバスなので当たり前と言えそうかもしれないが、なんと前と後ろに運転席があり、まるで電車のようなようである。二両編成のこのバスに5分間乗ると島に着く。

この島は簡単にいえば江の島だ。砂洲で陸地とつながり島の中央に修道院とも城ともいえる施設があり、周りを民家を取り巻いている。民家といっても今はレストランや土産物屋である。周囲1kmほどの小さな島である。

この修道院が今から1300年前にロマネスク様式で建てられて、そして800年前に増築されたので当時のゴシック様式も残っている。まさしく歴史がそのまま残っている。英仏100年戦争の時には要塞としてフランス軍が使用したということで、ナポレオン3世の時代には牢獄としても使用されており、石の建造物なので歴史が延々と継がれ残っている。

遠くから見る外観も素晴らしいが、内部もとても素晴らしい。そして建物の城壁から見る海や庭も素晴らしい。海は浅瀬になっており若者たちのグループが何十人もそこを歩く姿が見える。ウユニ塩湖のような光景に見える。残念ながらウユニ塩湖を私は訪れたことがないので正確にはわからないがきっとこんな光景なのだろうと思う。

